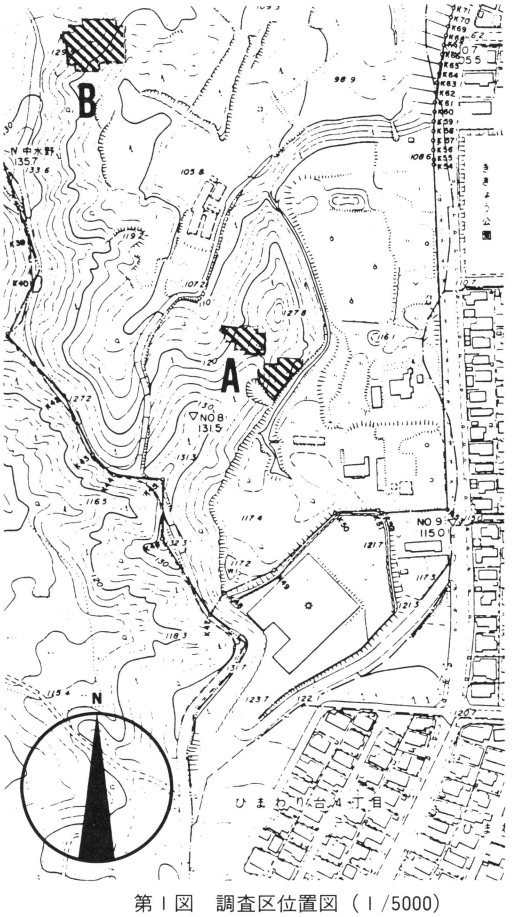
小田妻古窯跡群（おだづま）

調査の経過

小田妻古窯跡群は、瀬戸古窯跡群内の北西部、水野地区に位置し、水野川の南の低位丘陵上に立地する鎌倉時代の古窯である。この地域は、以前から陶片の散布地として知られ、昭和58・59年に実施された愛知県教育委員会による分布調査により、窯跡の存在が確認されていた。今回の調査は、住宅・都市整備公団による水野特定土地区画整理事業に伴う事前調査として実施されたものである。A・B２地区、約2000m²の調査の結果、窯体６基・工房跡１ヶ所等を確認した。A・B両地区とも、窯体は分焔柱を有する窖窯である。

（日比　宰）



第１図　調査区位置図（１/5000）

Aa区窯体全景

B区SY02・SY04

調査の概要

A区　A区は調査範囲が尾根の両側にまたがっているため便宜上2つにわけ、屋根の南東斜面をAa区、北西斜面をAb区とした。Aa区では窯体3基・工房跡1ケ所、Ab区では窯体1基を検出した。Aa区の灰原は下半分が後世の整地によって削平されていたが、窯体の残存状態はよく、なかには天井の一部が残っているものもあった。窯体はすべて分焔柱を有する13世紀頃の窖窯である。窯体の長さは10m前後で、最大幅は3mを超えるものが多い。工房跡はAa区の斜面の一端を掘り排水溝をめぐらせ、低部に盛土をして平坦面を造り出している。床面には多くのピット・生の粘土・炭・焼土やカマドらしきものがみられる。またピットの一つに灰白色粘土を充塡したものがあり、重ね焼きした灰釉系陶器が正位置で埋められていた。それを取り除くと黄色の砂が詰まった径約10cmの穴がみつかった。おそらくこれはロクロピットと考えられる。

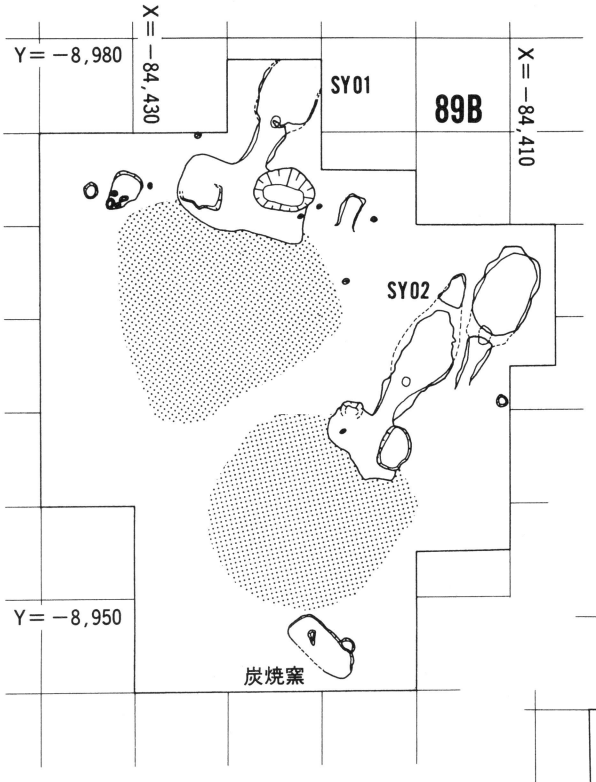
遺物は灰原から13世紀の灰釉系陶器椀・小皿・こね鉢が多量に出土している。また陶錘や陶丸もあるが、これら日常雑器に混って施釉陶器である灰釉四耳壺や火舎形香炉、他に窯の前庭部や工房跡から工人が煮炊きに使用したと思われる土師鍋・羽釜も出土している。

B区　B区では、丘陵の南東斜面に窯体2基・構築途中で放棄された窯2基・炭焼窯1基等を検出した。窯体のうち1基は後世の整地によって上半分を削平されていたが、もう1基と灰原は完存していた。窯体は形状・規模ともA区と同様に、分焔柱を有する窖窯で長さ10m前後・最大幅3m程度のものである。構築途中で放棄された窯は、SY03は焚き口部分のみを掘り、分焔柱の脇を少し掘りかけた状態で中止して後に粘土だめに転用している。SY04は分焔柱の脇を掘りぬき、焼成室を掘削してやめている。炭焼窯は楕円形のプランを有するもので、床面には炭が残っていたが出土遺物はほとんどなく、また灰原末端に位置しているため、年代や窯体との関係は不明である。

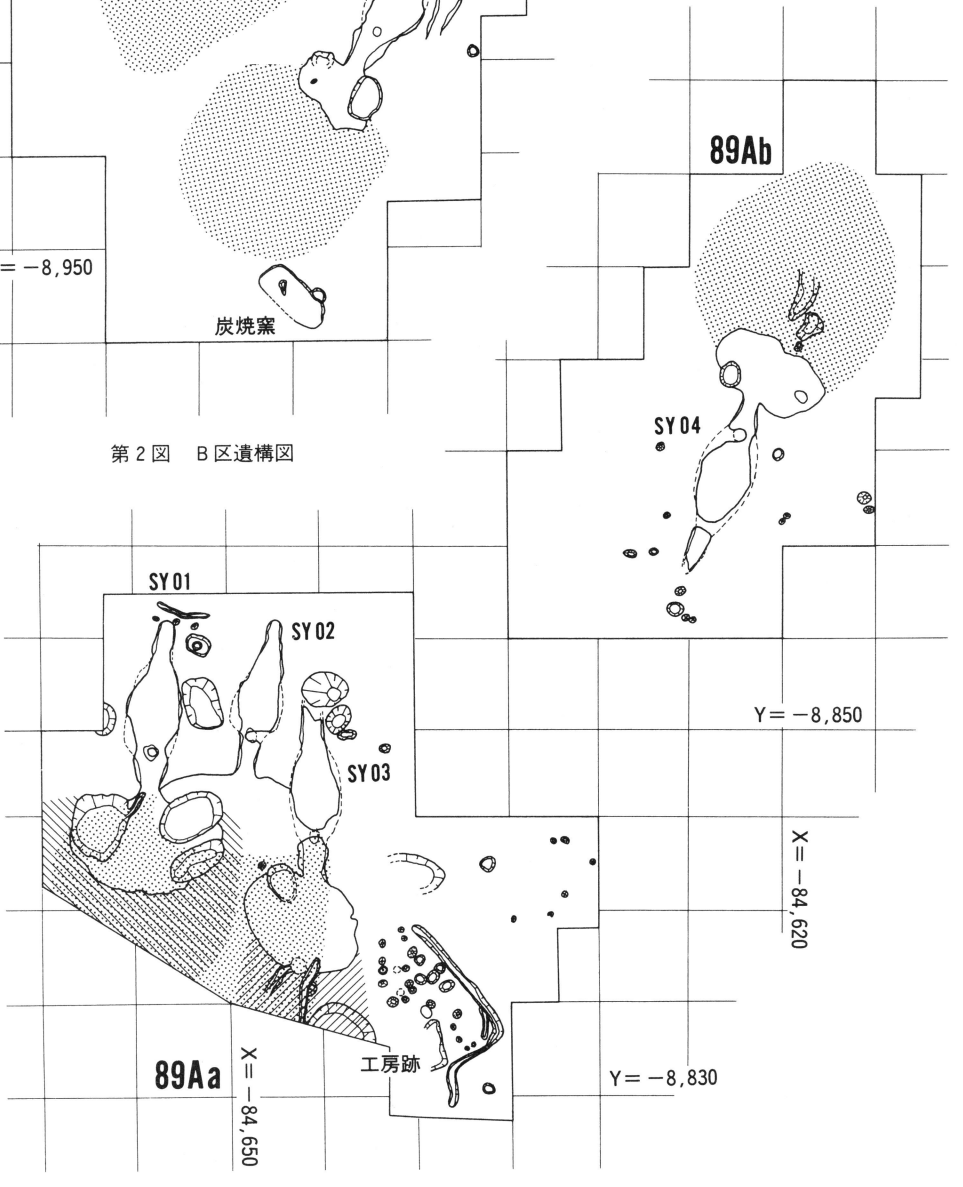
遺物は灰原から13世紀中の灰釉系陶器椀・小皿や陶錘・陶丸が、また窯の前庭部から工人が煮炊きに使用したと思われる土師鍋・羽釜が出土している。　　（山口　昌直）

Aa区SY01

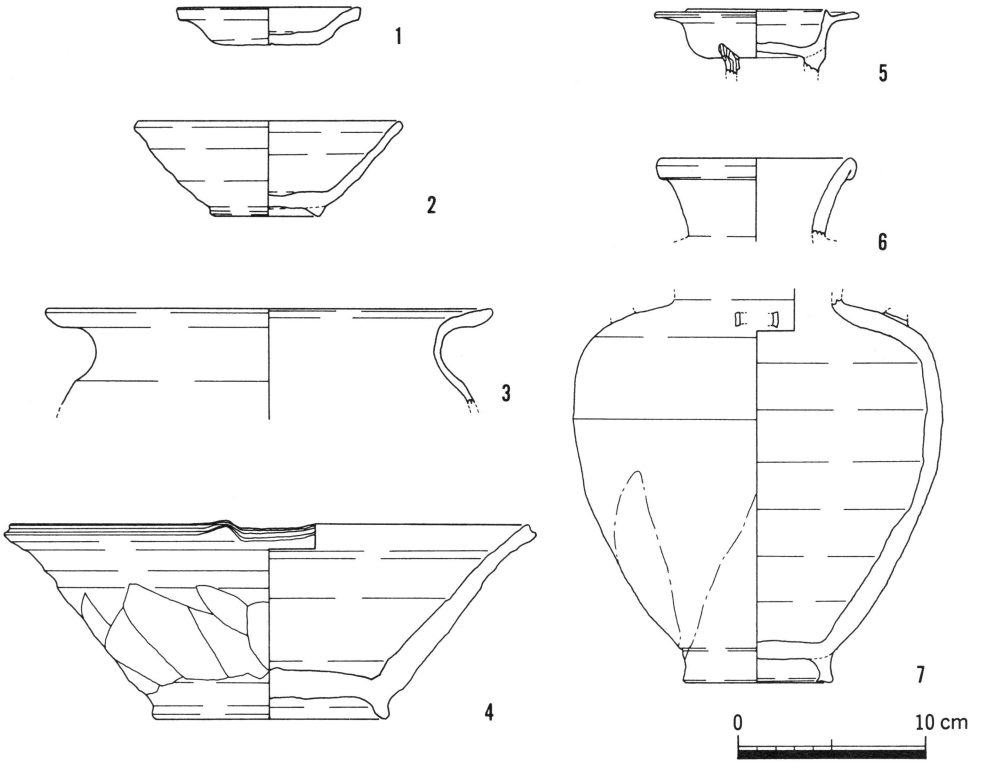
Aa区ロクロピット



第２図　Ｂ区遺構図



第３図　Ａ区遺構図



第４図　出土遺物（１．Aa区SY01焚口遊離、２・４～７．Aa区灰層、３．Ｂ区SY01前庭埋土）

まとめ

調査の結果、様々な新しい知見が得られた。そのなかでいくつかを取り上げてみる。

遺構の面ではＡ区の工房跡とロクロピットの発見があげられる。工房跡にはカマドのようなものや炭化物が発見され、ある時期に製作者たちの生活の場となっていた可能性もある。ロクロピットには重ね焼きされた灰釉系陶器が詰められ、その上に粘土をかぶせて覆っている。これは製作者たちが工房を放棄する段階でロクロピットを埋めたのか、しばらく使用しないとき次にまた使えるように保護する意味で粘土をで覆ったのか大変興味深い。また、Ｂ区で掘かけの窯が２基見つかっている。それぞれ中止された段階が違い、窯の構築方法を知る上で一つの好資料となるであろう。

遺物の面では灰層から出土した灰釉四耳壺の問題があげられる。灰釉四耳壺は二十数点出土しているが、灰釉系陶器と一緒に焼いていたのか再利用したものなのかはっきりしない。再利用した痕跡のないものが多いところから、併焼した可能性は高い。灰層の最下層からは12世紀にさかのぼる胎土の精良な灰釉系陶器や香炉も出土しており、四耳壺との関連を検討しなければならない。また、12世紀代のいわゆる“均質手”の灰釉系陶器が水野地区でも焼かれていたということは注目される。　　（城ヶ谷和広）